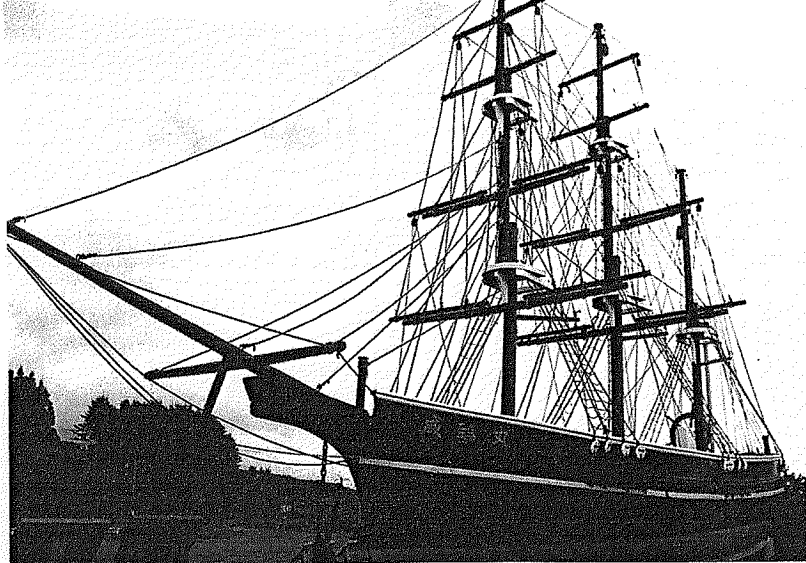


# 威臨丸で マチ起こし

1

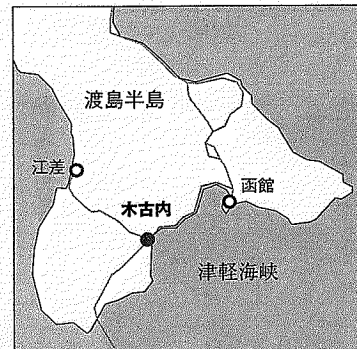
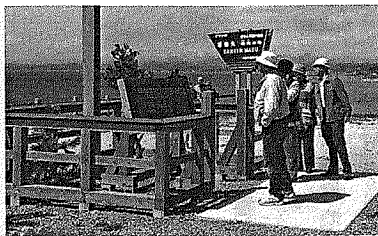
## 北海道木古内町

威臨丸終焉の地となった北海道木古内町では、毎年8月には威臨丸祭りが開催されるなど、町挙げての賑わいに包まれている。



チューリップ公園に設けられた威臨丸のモニュメント

威臨丸終焉記念碑に見入る観光客



威臨丸子孫の会も加わった威臨丸祭りの華麗なパレード



各地からの観光客で賑わったチューリップ祭り

**北** 北海道の南、函館に近い木古内町は

いま、威臨丸で燃え上がっている。威臨丸が座礁、沈没した沖合を望む更木岬に「威臨丸終焉の地」碑が建立され、威臨丸のモニュメントが設けられた。季節になると威臨丸と同じオランダ産の5万本のチューリップが一面に花を開かせる。毎年8月には「威臨丸祭り」が催され、町挙げての賑わいに包まれる。

「威臨丸ここに眠る」と書かれた大きな看板。木古内町観光協会が地元で長く伝えられてきた威臨丸の最期を後世に伝えようと、建てたものだが、しかし10数年ほど前までは、その事実を知る人は少なかった。

きっかけは北海道在住の作家、合田一道さんが、日本海事広報協会主催の第1回海洋文学大賞コンフィクションの部に応募、優秀賞を受賞した作品「叫べ、威臨丸」をもとに、全編を書き改め、「威臨丸栄光と悲劇の5000日」(北海道新聞社刊)の表題で発刊したことになる。

地元木古内町民の間で話題になり、2004年、観光協会の有志が中心になり、威臨丸で町おこしをしようと、合田さんを招いて講演会を開催し、「威臨丸とサラキ岬に夢見る会」(久保義則会長、会員約500人)が発足した。歴史を学びながら、手弁当で威臨丸の終焉の地の更木岬の整備に取りかかり、一方オ

ランダの北海道人会の協力で、チューリップを毎年送ってもらい、見事なチューリップ公園が誕生。威臨丸のモニュメントも設けられた。

この間に威臨丸子孫の会(小林賢吾会長)のメンバーである木村撰津守、勝海舟、小杉雅之進、浜口興右衛門などの子孫が相次いで来町し、サラキ岬に夢見る会のメンバーと交流を深めた。この縁で、威臨丸の出航地の横須賀や浦賀とも親しい関係ができた。

2005年夏から威臨丸祭りが始まった。8月中旬の2日間で、最終日はパレードが行われ、威臨丸ゆかりの人物に扮した役員たちや威臨丸子孫の会の会員が、飾りたてた船型の山車教台に乗り込み、町内を華やかに練り歩く。

パレードが到着する町役場横のお祭り広場には、露店がぎっしり立ち並び、大勢の人たちが詰めかけ、夏の夜の一時を満喫する。

2011年は威臨丸が座礁、沈没して150年になる。サラキ岬に夢見る会事務局長の多田賢淳さんは「威臨丸こそわが町の誇る文化遺産。150年を記念して、子孫の会などの協力を得て威臨丸サミットを開きたい。合田さんが書き下ろした野外劇「永久に威臨丸」は町民100人が出演する大がかりなものだが、ぜひ実現したい」と語っている。